

小倉
百人
一首

一

秋の田の
かりほの庵の
とまをあらみ

我が衣手は
露にぬれつつ

天智天皇

二

春すぎて
夏きにけらし
白妙の

衣はすてふ
天の香具山

持統天皇

三

あしびきの
山鳥の尾の
しだり尾の

ながながし夜を
ひとりかも寝む

柿の本の人麻

四

田子の浦に
うち出でて見れば
白妙の

富士の高嶺に
雪は降りつつ

山部赤人

五

奥山に
紅葉ふみわけ
鳴く鹿の

声きく時ぞ
秋は悲しき

猿丸太夫

六

鵲の
わたせる橋に
置く霜の

白さを見れば
夜ぞ更けにける

中納言家持

七

天の原
ふりさけ見れば
春日なる

三笠の山に
出でし月かも

安倍仲麿

八

わがいほは
都のたつみ
しかぞすむ

世をうち山と
人はいうなり

喜撰法師

九

花の色は
移りにけりな
いたづらに

わが身世にふる
ながめせしまに

小野小町

十

わがいほは
都のたつみ
しかぞすむ

世をうち山と
人はいうなり

喜撰法師

十一

わたの原
八十島かけて
漕ぎ出でぬと

人には告げよ
あまのつり船

参議篁

十二

天つ風
雲の通ひ路
吹きとちよ

をとめの姿
しばしとどめむ

僧正遍照

十三

筑波嶺の
峯より落つる
みなのか

こひぞつもりて
淵となりぬる

陽成院

十四

陸奥の
しのぶもちずり
誰ゆゑに

みだれそめにし
我ならなくに

河原左大臣

十五

君がため
春の野に出でて
若菜つむ

わが衣手に
雪は降りつつ

光孝天皇

十六

立ち別れ
いなばの山の
峯に生ふる

まつとし聞かば
今かへり来む

中納言行平

十七

ちはやぶる
神代もきかず
立田川

からくれなゐに
水くくるとは

在原の業平朝臣

十八

住の江の
岸に寄る波
よるさへや

夢の通ひ路
人めよくらん

藤原敏行朝臣

十九

難波潟

みじかき蘆の

ふしの間も

逢はでこの世を

すぐしてよとや

伊勢

二〇

わびぬれば
今はた同じ
難波なる

みをつくしても
逢はむとぞ思ふ

元良親王

二一

今来むと
いひしばかりに
長月の

有明の月を
待ち出でつるかな

素性法師

二二

吹くからに
秋の草木の
しをるれば

むべ山風を
嵐というらむ

文屋康秀

二三

月見れば
ちぢに物こそ
かなしけれ

わが身ひとつの
秋にはあらねど

大江千里

二四

このたびは
幣もとりあへず
手向山

紅葉のにしき
神のまにまに

菅家

二五

名にし負はば
逢坂山の
さねかつら

人に知られで
くるよしもがな

三條右大臣

二六

小倉山
峰のもみぢば
心あらば

今ひとたびの
みゆき待たなむ

貞信公

二七

みかの原
わきて流るる
いづみ川

いつみきとてか
恋しかるらむ

中納言兼輔

二八

山里は
冬ぞ淋しさ
まさりける

人目も草も
かれぬと思へば

源宗于朝臣

二九

心あてに
折らばや折らむ
初霜の

置きまどはせる
白菊の花

凡河内躬恒

三〇

有明の
つれなく見えし
別れより

暁ばかり
うきものはなし

壬生忠岑

三一

朝ぼらけ
有明の月と
見るまでに

吉野の里に
降れる白雪

坂上是則

三二

山川に
風のかけたる
しがらみは

流れもあへぬ
紅葉なりけり

春道列樹

三三

ひさかたの
光のどけき
春の日に

しづごころなく
花の散るらむ

紀友則

三四

誰をかも
知る人にせむ
高砂の

松も昔の
友ならなくに

藤原興風

三五

人はいさ
心も知らず
ふるさとは

花ぞむかしの
香ににほひける

紀貫之

三六

夏の夜は
まだ宵ながら
明けぬるを

雲のいづこに
月宿るらむ

清原深養父

三七

37.

白露に
風の吹きしく
秋の野は

つらぬき止めぬ
玉ぞ散りける

文屋朝康

三八

忘らるる
身をば思はず
誓ひてし

人の命の
惜しくもあるかな

右近

三九

浅茅生の
小野のしのはら
しのぶれど

あまりてなどか
人の恋しき

参議等

四〇

しのぶれど
色に出でにけり
わが恋は

ものや思ふと
人の問ふまで

平兼盛

四一

恋すてふ
わが名はまだき
立ちにけり

人知れずこそ
思ひそめしか

壬生忠見

四二

契りきな
かたみに袖を
しぼりつつ

末の松山
浪こさじとは

清原元輔

四三

逢ひ見ての
後の心に
くらぶれば

むかしは物を
思はざりけり

中納言敦忠

四四

逢ふことの
絶えてしなくば
なかなかに

人をも身をも
恨みざらまし

中納言朝忠

四五

あはれとも
言ふべき人は
思ほえで

身のいたづらに
なりぬべきかな

謙徳公

四六

由良の門を
わたる舟人
かぢを絶え

ゆくへも知らぬ
恋のみちかな

曾根好忠

四七

八重葎
しげれる宿の
さびしきに

人こそ見えね
秋は来にけり

恵慶法師

四八

風をいたみ
岩うつ浪の
おのれのみ

砕けてものを
思ふ頃かな

源重之

四九

みかきもり
衛士の焚く火の
夜は燃え

昼は消えつつ
物をこそ思へ

大中臣能宣朝臣

五〇

君がため
惜しからざりし
命さへ

長くもがなと
思ひけるかな

藤原義孝

1) ㊦
bue

五一

かくとだに
えやはいぶきの
さしも草

さしも知らじな
燃ゆる思ひを

藤原実方朝臣

五二

明けぬれば
暮るるものとは
知りながら

なほ恨めしき
朝ぼらけかな

藤原道信朝臣

五三

歎きつつ
ひとりぬる夜の
明くる間は

いかに久しき
ものとかは知る

右大将道綱母

五四

54.

忘れじの
行末までは
かたければ

“N
Pei
Qu
Ojɛ
fue

今日をかぎりの
命ともがな

儀同三司母

五五

滝の音は
絶えて久し
くなりぬれど

名こそ流れて
なほ聞えけれ

大納言公任

五六

あらざらむ
この世のほかの
思ひ出に

いまひとたびの
逢ふこともがな

和泉式部

五七

めぐりあひて
見しやそれとも
わかぬ間に

雲がくれにし
夜半の月かな

紫式部

五八

ありま山
るなの笹原
かぜ吹けば

いでそよ人を
忘れやはする

大弐三位

五九

やすらはで
寝なましものを
さ夜ふけて

かたぶくまでの
月を見しかな

赤染衛門

六〇

大江山
いく野の道の
遠ければ

まだふみも見ず
天の橋立

小式部内侍

六一

いにしへの
奈良の都の
八重桜

けふ九重に
匂ひぬるかな

伊勢大輔

六二

夜をこめて
鳥のそらねは
はかるとも

よに逢坂の
関はゆるさじ

清少納言

六三

今はただ
思ひ絶えなむ
とばかりを

人づてならで
言ふよしもがな

左京大夫道雅

六四

朝ぼらけ
宇治の川霧
たえだえに

あらはれ渡る
瀬瀬の網代木

権中納言定頼

六五

恨みわび
乾さぬ神だに
あるものを

恋に朽ちなむ
名こそ惜しけれ

相模

あはれと思へ
山櫻

花よりほかに
知る人もなし

前大僧正行尊

六七

67.

春の夜の
夢ばかりなる
手枕に

かひなく立たむ
名こそ惜しけれ

周防内侍

六八

心にも
あらでうき世に
ながらへば

恋しかるべき
夜半の月かな

三條院

六九

あらし吹く
三室の山の
もみぢ葉は

龍田の川の
錦なりけり

能因法師

七〇

さびしさに
宿を立ち出でて
ながむれば

いづこも同じ
秋の夕暮

良暹法師

七一

夕されば
門田の稲葉
おとづれて

蘆のまろ屋に
秋風ぞ吹く

大納言経信

七二

音にきく
高師の浜の
あだ浪は

かけじや袖の
ぬれもこそすれ

祐子内親王家紀伊

七三

高砂の
をのへの櫻
さきにけり

外山のかすみ
立たずもあらなむ

権中納言匡房

憂かりける
人をはつせの
山おろし

はげしかれとは
祈らぬものを

源俊頼朝臣

七五

契りおきし
させもが露を
命にて

あはれ今年の
秋もいぬめり

藤原基俊

75.

Lo prometiste,
Y como para las artemisias el rocío,
Fue vida.
: Ah! pero este año

七六

わたのはら
漕ぎいでて見れば
ひさかたの

雲みにまがふ
沖つ白波

法性寺入道前
関白太政大臣

七七

瀬を早み
岩にせかるる
滝川の

われても末に
あはむとぞ思ふ

崇徳院

七八

淡路島
かよふ千鳥の
鳴く声に

幾夜ねざめぬ
須磨の関守

源兼昌

七九

秋風に
たなびく雲の
絶え間より

洩れいづる月の
影のさやけさ

左京大夫顕輔

八〇

長からむ
心も知らず
黒髪の

乱れて今朝は
ものをこそ思へ

待賢門院堀河

八一

ほととぎす
鳴きつる方を
ながむれば

ただ有明の
月ぞ残れる

後徳大寺左大臣

八二

思ひわび
さても命は
あるものを

憂きに堪へぬは
涙なりけり

道因法師

八三

世の中よ
道こそなけれ
思ひ入る

山の奥にも
鹿ぞ鳴くなる

皇太后宮大夫俊成

八四

ながらへば
また此の頃や
しのぼれむ

憂しと見し世ぞ
今は恋しき

藤原清輔朝臣

八五

夜もすがら
物思ふころは
明けやらで

閨のひまさへ
つれなかりけり

俊恵法師

八六

なげけとて
月やは物を
思はする

かこち顔なる
わが涙かな

西行法師

八七

87.

村雨の
露もまだひぬ
まきの葉に

霧たちのぼる
秋の夕ぐれ

寂蓮法師

八八

難波江の
蘆のかりねの
ひとよゆゑ

身をつくしてや
恋ひわたるべき

皇嘉門院別当

玉の緒よ
絶えなば絶えね
ながらへば

忍ぶることの
弱りもぞする

式子内親王

九〇

見せばやな
雄島のあまの
袖だにも

濡れにぞ濡れし
色はかはらず

殷富門院大輔

九一

きりぎりす
鳴くや霜夜の
さむしろに

衣かたしき
ひとりかも寝む

後京極摂政
先太政大臣

九二

わが袖は
潮干に見えぬ
沖の石の

人こそ知らね
乾くまもなし

二條院讃岐

九三

世の中は
常にもがもな
渚こぐ

あまの小舟の
綱手かなしも

鎌倉右大臣

九四

み吉野の
山の秋風
さ夜ふけて

ふるさと寒く
衣うつなり

参議雅経

九五

おほけなく
うき世の民に
おほふかな

わがたつ袖に
墨染の袖

大僧正慈円

九六

花さそふ
嵐の庭の
雪ならで

ふりゆくものは
わが身なりけり

入道前太政大臣

九七

来ぬ人を
まつほの浦の
夕なぎに

焼くや藻塩の
身もこがれつつ

権中納言定家

九八

風そよぐ
ならの小川の
夕暮は

みそぎぞ夏の
しるしなりける

従二位家隆

九九

人もをし
人もうらめし
あぢきなく

世を思ふゆゑに
もの思ふ身は

後鳥羽院

一〇〇

ももしきや
古き軒端の
しのぶにも

なほあまりある
昔なりけり

順徳院